

(日置郡金峰町花瀬)

位置と環境

遺跡は、万之瀬川河口から約7.5kmさかのぼった川の右岸、標高約6mの自然堤防上に立地している。万之瀬川の氾濫によって形成された沖積平野である。地層は、河川堆積物の砂と黒色の腐食土層が交互に堆積している。遺物包含層は縄文時代前期から近世にかけて7枚あった。下流には芝原遺跡、渡畑遺跡、持鉢松遺跡などが所在する。

調査の経緯

万之瀬川流域の河川改修に伴って、平成7年(1995)に金峰町教育委員会が確認調査を、平成12・15・16年度に県教育委員会が本調査を実施した。

遺構と遺物

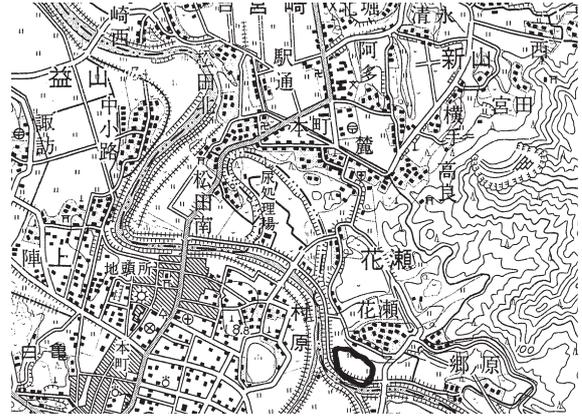
これまでの調査では、縄文時代前期・中期・後期・晩期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構や遺物が発見された。

縄文時代前期の土器は、曾畑式土器(第2図1)が出土している。また、石器としては、石斧・石鏃・石匙等が出土している。遺物の分布は、遺跡北側の一部分に集中しており、平成16年度の調査でこの広がりがある現在の河川近くまで確認されている。

縄文時代前期後葉の遺構は、集石3基、焼土跡多数、土坑、頁岩の集積1か所が検出された。これらは、河岸段丘状に高くなっている部分から集中して検出され、このエリアが当時の生活の中心であったと考えられる。

この時期の土器には、深浦式土器(第2図2)が出土している。ほぼ完形に復元できそうなほど土器片が集中している場所が3か所あった。石器としては、石斧・石鏃・石匙・磨石・石皿などが出土している。このほか、黒曜石のフレイク・チップ類も多く出土している。

縄文時代中期の遺構には、集石(第3図8)など、焼土跡、土坑、黒曜石のデポが検出された。集石は、全体的に炭化物が砂にしみこみ黒っぽくなっている部分から10数基重なるように検出されている(写真1)。狭い範囲の中で時間差を伴いながら何度も繰り返し集石が作られたと考えられる。この周辺からは石器を製作したと思われる黒曜石のフレイク・チップ類も多く出土している。また、百個程度のこぶし大の石を組んだ集石が5基、弧状に並んで検出



第1図 上水流遺跡の位置

されている。黒曜石のデポは、3~5cm程度の黒曜石を5、6個集積したもので、遺跡北側部分に集中して5基検出されている。

この時代の土器には、春日式土器(第2図3)条痕文系土器、船元系土器(第2図4)が出土している。春日式土器は10数か所でほぼ完形の深鉢が横倒しになった状態で検出されている(写真2)。石器には、石斧・石鏃・石匙・磨石・石皿などが出土している。

縄文時代後期の遺構には、焼土跡が検出されている。

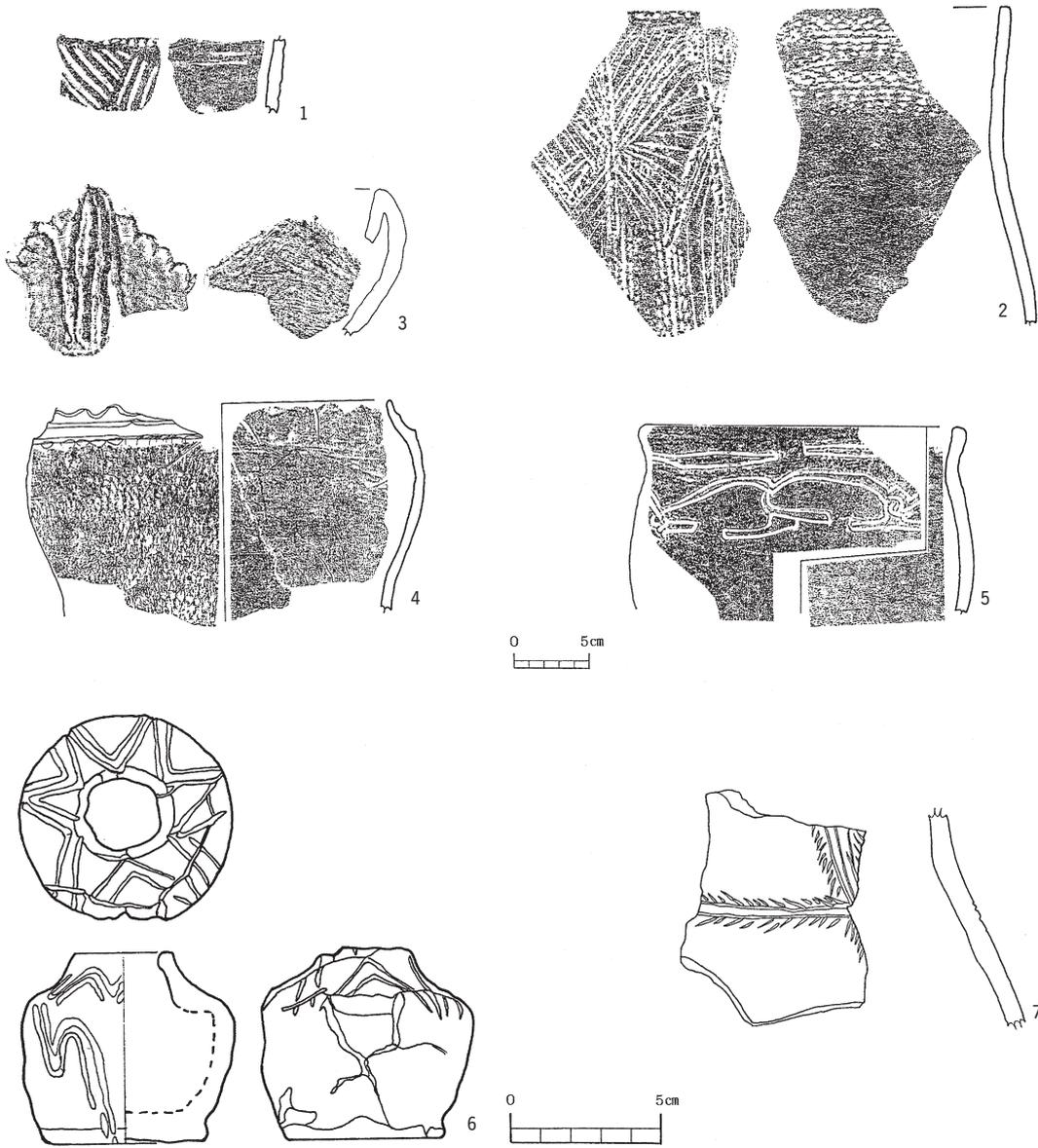
この時代の土器には、指宿式土器(第2図5)が出土している。また、小壺が1点検出されている(第2図6)。これまでに類例のないものである。そのほかに注目されるものとしては、土器片が集中して出土した場所が5か所程度あった。石器としては、石斧・石鏃・石匙・磨石・石皿などが出土している。

縄文時代晩期の遺構には、すり鉢状土坑1基、土坑2基、集石1基、焼土跡多数が検出されている。

この時代の土器には、入佐式土器、黒川式土器が出土している。土器片が集中して出土した場所が5か所程度あった。また、ほぼ完形に復元できそうな土器が1点出土している。このほか、南島系の壺形



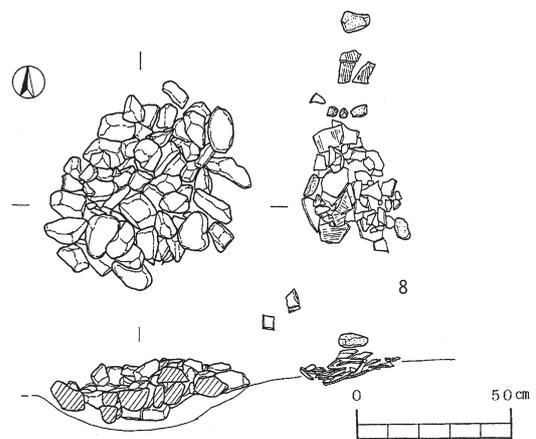
写真1 集石検出状況



第2図 上水流遺跡出土遺物



写真2 春日式土器出土状況



第3図 集石実測図

土器（第2図7）も同じ包含層から出土している。この土器は、鳥の羽状の文様が施され、復元すると高さ25cm程度になると考えられる。本土では初めての出土である。九州の土器が奄美や沖縄に伝わった例は多く報告されているが、南島系の土器が九州本土で出土したことは、南から北へもモノ（及び人）が動いていたことを示す貴重な資料になる。

また、開間岳噴出の灰ゴラ火山灰の可能性のある層も確認され、遺物との関係を留意していく必要がある。

古墳時代の遺構には、土坑が1基検出された。このほか、平成16年度の調査では、竪穴住居跡が3軒以上検出されている。このうちの1軒から初期須恵器の取手付碗が出土しており、在地の土器との関係など注目されよう。

古代の遺物には、土師器、須恵器が出土している。なお、時代を特定するには至っていないが、古代末の層から礫集積遺構が6基検出されている。これらは一列に並んだ状態で検出されており、注目されている。

中世の遺構には、方形竪穴建物跡、掘立柱建物跡、竈跡などが検出された。方形竪穴建物跡は、約2m四方で深さが約80cm程度ある。

竪穴中の中心部に焼土と炭化物があり、四隅に柱穴が検出されたが、貼床は確認されなかった。埋土中の遺物は竜泉窯系の青磁、糸切りの土師器、須恵器である。このほか、柱穴群が集中して検出されている。竈跡は集中して検出され、床部分に炭化物が1cm程度層をなしている。

この時期の遺物には、輸入陶磁器、土師器、須恵器、古銭（洪武通寶・永楽通寶など）、滑石製石鍋等が出土している。

近世の遺構には、溝状遺構が10数条、大規模土坑が4基、古道が数本、集石が5基、炉跡が多数、土壙墓が円形3基、長方形3基その他可能性のあるもの数基検出された。溝状遺構は、幅2～4m深さ1～1.5mで、中に陶磁器や鉄滓・炭水化物などを含む礫の列がある。礫の列は溝の掘り出し面付近に集中しており、溝がある程度埋まったところで廃棄されたのではないかと考えられる。大規模土坑の形状は、幅3～5m、深さ約2mで、平面は基本的に長楕円形（あるいはカマボコ形）で、断面は、床がフラットなU字形である。土坑内部の片側から焼礫、鉄滓、炭化物、陶磁片（17～18C）、炉壁の一部等がまとめて出土している。それらはまとめて廃棄された

様子がうかがえる。その反対側の斜面には古道、もしくは階段状遺溝がある。本遺構は、溝状遺構と連結しており、古道とは平行する。これらは互いに関連する可能性が高い。

特徴

縄文時代前期後葉から中期にかけて、深浦式土器や春日式土器がまとめて出土している。特に完形土器の量の多さが目立つ。遺構には、集石、焼土跡が主体であり、住居跡は検出されなかった。これらの遺構については、その配置に特徴がみられる。

縄文時代前期末から中期にかけての焼土跡は、河岸段丘の稜線に沿うように直線的に並ぶ。集石については、前期は掘込みが浅く、小型礫主体なのに対し、中期のものは中～大型礫主体で掘込みが深くまとまりがある。

特筆すべきは、遺跡南部で検出された中期の集石群で、約5m四方の中で、2～3層にわたって10数基という高密度で集中している。この集石群は、砂丘という地理的条件を考慮しても極めて特徴的といえる。このように集石、焼土、デポ等の遺構群、および多くの完形土器の存在という状況から判断し、長期的な生活の可能性も考えられる。縄文時代の河川隣接地での生活のあり方を考える上で極めて重要な遺跡である。

また、縄文時代晩期の南島系土器の発見は、南九州と南島の土器の時間的並行関係を知る好資料であり、この時代の南九州と南島との交流の在り方を考える上で興味深いものがある。さらに、近世の溝状遺構や大規模土坑を中心とする一連の特徴的遺構群は製鉄・鍛冶に関係する可能性がある、この時期の製鉄・鍛冶施設を考える上で一つの示唆を与えるものである。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

金峰町教育委員会1998「上水流遺跡第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』9

（宗岡克英）